



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 多田神社                                                                                |
| Author(s)    | 中村, 直勝                                                                              |
| Citation     | 懷徳. 1937, 15, p. 59-64                                                              |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/88977">https://hdl.handle.net/11094/88977</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

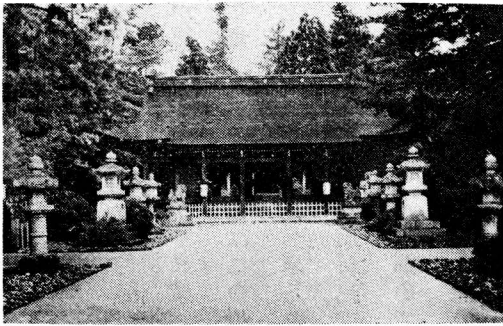
*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 多田神社

中村 直勝



多田神社

多田神社

多田といふ場所を考へて見ますと、あそこの鐵道の鐵橋を渡りました所から中の方が、大きな一つの盆地で、平野を成して居るのであります。さうして周圍がすっかり山で圍まれて居るのであります。そこであそこの鐵橋のある所を一ヶ所防ぎさへすれば、即ち一夫關に當れば萬夫も破ることが出來ないといふ非常な、嶮岨な位置を占めて居るのであります。此の地に昔から傳へられて居る一つの物語がありまして、屏風岩の所に九つの頭をもつて居る龍が居つて、それが邪魔をするのを、滿仲公が平げたといふ傳説をもつて居りますが、その九つの龍が何者であるか凡そ見當がつかず。即ち滿仲公の言ふことを聞かなかつた兇惡な者といふことが考へられるのであります。その關所を破つてこの中へはいりますと、斯ういふいゝ川もあります。さうしてその川を傳うて下れば、攝津の

中心地に出ることも出来るのであります。又これを廻れば山の中へはいれるのであります。守るによく、攻むるによい位置をもつて居るのであります。

どういふわけで満仲公が此處へ来たかと申しますと、實はこゝから山の方へ少しく廻りますと、銅が澤山出たのであります。攝津の採銅所といふのは、可なり古くから史料の上に澤山出て来るのであります。銅鑛などはこの岩の中に露頭をあらはすことがあるのださうであります。あゝいふ源氏なら源氏が斯ういふ處へ来るのは、何かそこに財源があるのであります、それを見つけて占領するのであります。多田源氏が此處を占領したのは何かなしに、占領したのではなく、一つの財源即ち銅であつたからだらうと思ふのであります。それを占領致しますことは、多田源氏が今後の歴史に非常に活動し得た原因になると思ひます。丁度多田源氏の興ります頃、平安朝の末頃は、支那に於きましても宋の末にはいつて居るのであります、盛んに貨幣といふものに目をつけて居つた時代であります。従つて清盛が攝津の福原から、宋と貿易をしたといふこともありますやうに、宋の文明が盛んに我國にはいつて居りました。さうして今までの賣買は米を中心としたもので、言はゞ米經濟といふものであります、今後は貨幣經濟にならねばならぬといふ事を暗示して居るのであります。そこに先見の明がありまして、當時は貨幣と申しましても銅貨幣でありますから、銅山を占領せられたのであります、其處を逸早く占領して居つたのが、九頭の龍ではなかつたでせうか。

さうしてこの邊に根據を占めました満仲一派が、殊に満仲公が死なれました時に、今の社の後ろにあります所の廟所を拵へられたのであります。そのお墓を中心に神社が出来ましたのが、多田神社なのであります。これは、神社としては割合に珍しい例でありまして、お墓をそのまゝ神社にするといふことは、此處ともう一つ京都の東寺の傍に六孫王のお墓がありますが、それだけなのであります。さうして一族郎黨の人が、この神社を中心として多田の御家人となつて、永く此處に勢力をもつて居つたのであります。室町の戰國時代の末まで、多田の御家人といふものが居るのであります。御家人といふのは家の人といふことでありまして、多田の満仲公の家來といふ風なものなであります。簡単に申しますならば、親分子分の關係をもつのでありまして、武士といふものが主人に對する奉公人といふ繋りです。よつて武士の御家人といふものを研究するには、どうしても此のお社のもつて居る史料を研究する必要がありますのであります。併し此處に残つて居ります御家人は、一方に於きましては百姓でありまして、平素は百姓をやつて居つて、非常時になれば武器を執るといふものであつたらしいのです。それは此處にあります御家人の書判の形が、甚だ地位が低いものゝ有する形式であります事からも推知出來ます。書判といふものは、その人の地位に依り、地位相當のものが出來るのであります。無位の人はどうしても品がおちます。従つて此處の御家人も一面に於きましては威張つて居りましたも、畢竟するに平素は百姓を出ないやうであります。さうして本當の武士は此處を出て鎌倉に

行つて、本當の武士になつてしまつたのであります。此處に留まつて居り去るのは、單に番兵の暮しをして居つたらしいのであります。さういふやうなもの、社會的な組織を考へます時にも、非常に多田の研究が面白いのであります。

先程申しましたやうに、周圍山を以て圍まれた此の地點は一つの王國であります。一體どうして國家が出来るかといふ事を考へて見ますと、なか／＼分りにくいのでありますが、假りに此の多田を小さな國として見る時に、國家といふものがどうしてどんな所に結成されたかといふことを知る一つの標本になるのであります。ギリシヤの歴史を見る時に、アテネといふ小さな都市國家が出来ゐる。どうして小さな都市國家が出来るかといふことは、こゝに多田が比較研究の材料になるのであります。

茲にもう一つ面白いことは、お墓——此處では御廟といつて居りますが、その廟が鳴動するのであります。それは多田滿仲公が、國家のやり方に對して不平をもたれた時に、或は國家の不吉を豫見された時に、御廟に音がするのであります。この御廟が鳴動するといふことは、「よからぬことがあるぞ」と言ふ神様のお怒りであるといふので、その鳴動がありますと、あやまると申しますか、謝罪をされるのであります。その時の勅書などが相當當社に残つて居ります。後土門天皇の宣命なども残つて居ります。

又さういふ風な源氏の祖先の所でありますから、頼朝以來歷代の源氏、即ち足利、新田、徳川とい

ふ風な武家は、非常に此處を尊敬したのであります。特に徳川時代などは非常な崇敬を致したのであります。只今お社は可なり荒れて居りますけれども、昔のものをを見ると、相當立派な社をもつて居つたことが、明に分るのであります。但し此處の寶物館にあります寶物の中には、相當考慮しなければならんものがあるのであります。或は多田滿仲の筆だとか、或は源義家の筆だとかいふ風な、一寸他に類例のないやうなものがありますが、それはどうも危いのであります。よく書判などを蒐めました本などに、多田滿仲とか、頼光とか、義家とかの花押といふものが書いてありますが、それは此處のものを寫したのであります。さういふ風な他に例のないものは、可なり危いのであります。

大體と致しまして只今申しましたやうなことを頭に入れていたゞきまして、これからお社にお参りをし寶物館を見ます。

大體この神社が斯ういふ高見に居るといふことも、又斯ういふやうな平野を征服する時に、どういふやうに城を構へるか。といふやうな事を考へて御覽下さい。恐らく元はこの前面の橋はありませんでした。さうすると前面から来る敵を防いでしまふのであります。裏は山續きなんでありますから、此處を防ぐに後ろは自然のまゝでありますから、守るに非常に都合の好い所であります。さういふやうな處をちゃんと占領して居る。さういふやうな占領した處へ自分の死骸を埋めて廟所だと言はして、此處に一つの中心を置く。國家としての中心を、地理的にも精神的にも此處に置く。さうして多田王

國といふものを造つて居る。此處を段々廣げて行きましたら、日本といふものを考へられ、京都といふやうなものを考へられるのであります。さうするとこの丘陵が多田郷の帝都といふことになるのであります。さういつたやうなことを見ます時に、此處が一つの京都なんであります。帝都といふものがどうした所に出来るかについて、原始的には樹木といふやうなものが考へられます。さうして樹には非常な大きな杉などがあるのであります、お釋迦さんが菩提樹の下で説法してゐる何物か連絡が考へられるのであります。ですから今私共の居りますこの高い臺は多田郷の京であるといふことも考へられるのであります。